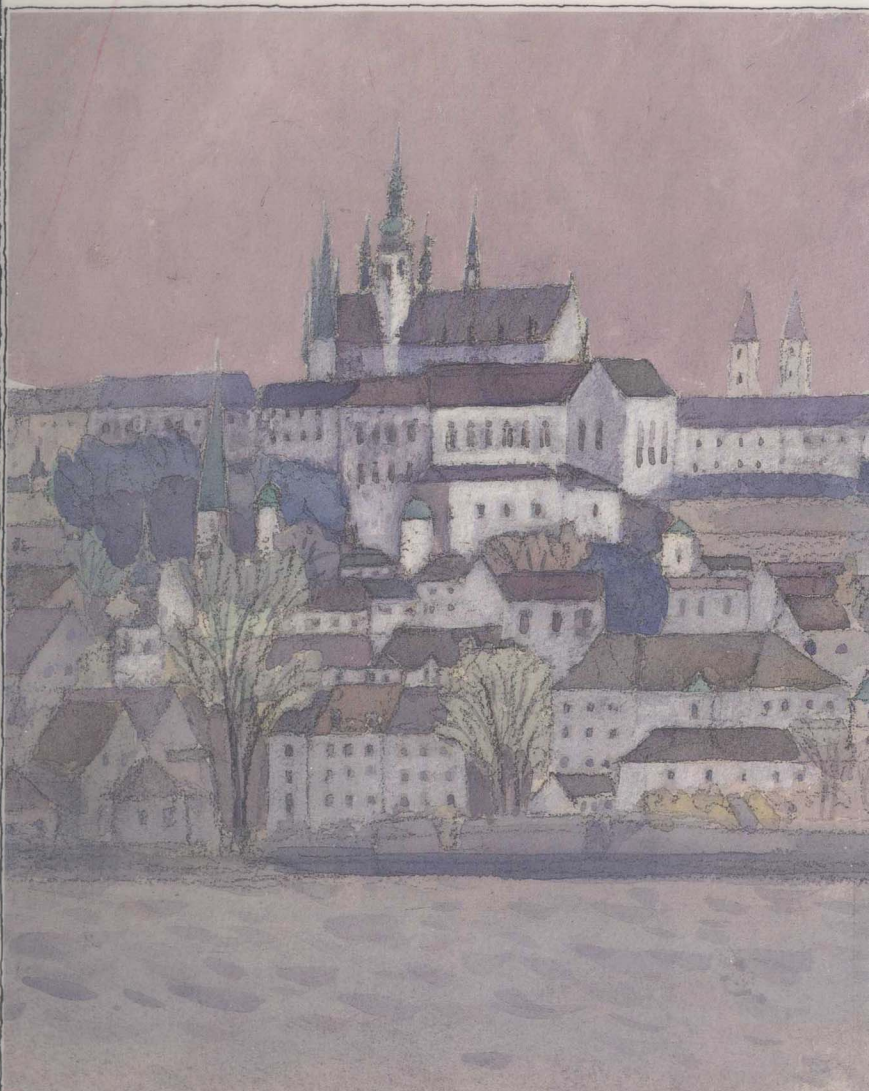


日本エッセイスト・クラブ編

96

'96年版ベスト・エッセイ集

父と母の昔話



’96年版ベスト・エッセイ集

日本エッセイスト・クラブ編

父と母の昔話

文藝春秋

父と母の昔話

——'96年版ベスト・エッセイ集——

一九九六年七月三十日第一刷

編者 日本エッセイスト・クラブ

発行者 新井 信

発行所 株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三ノ二三

電話 ○三―三二六五―一二二一

印刷所 精興社

製本所 中島製本

万一、落丁・乱丁があればお取換えいたします
定価はカバーに表示してあります

父と母の昔話 * 目次

時計は溶けて

本の話

“世界一”の叔母

震度7の記憶

時間の話

「山、人を見る」

アジア分業の時代

漢語の狭間

バースデイ・スーツ

揺りかご

苦学の実演

前向きっていいわね

司馬遼太郎

杉浦昭義

藤本義一

袖井孝子

古田紹欽

深田祐介

張美玉

坂村瞳

大江ゆかり

黒岩重吾

櫻井よしこ

12

18

24

29

33

36

41

45

53

57

64

ベニスの商人についての大誤解

思い出せなかった話

眼科医という仕事

時計は溶けて

空気の瓶詰

初詣、原点にかえる幸せ

ひやしもち

宇宙から遺跡を探る

見事な人生

黒姫の赤鬼を訪ねてほしい

老いて、思うこと

理系男と文系男

廣淵升彦 70

須賀敦子 74

坪田一男 79

早坂暁 85

栗田勇 94

田辺聖子 98

坂田俊文 106

うつみ宮土理 110

C・W・ニコル 116

遠藤周作 121

林真理子 126

戦記作家の五十年目

台湾の人たちが守った日本人銅像

豆腐と好奇心

名門大学

父の戦死地

今ふたたび戦後日本映画を見る

「いじめ」と「笑うカイチュウ」

広東人の郷土意識

空気の瓶詰

うさぎのダンス

自動車学校で学習したカラス

兄との終戦の夏

伊藤桂一

131

柳本通彦

136

斎藤茂太

140

若林ケイ

143

式守与太夫

149

川本三郎

153

藤田紘一郎

158

譚璐美

164

九野民也

168

うさぎのダンス

仁平義明

172

村松英子

178

防災担当相は“知恵伊豆”

熊本時代の漱石

大きなお世話

知覧と鹿屋を訪ねて

フェルディナン・シュヴァルの“理想宮殿”

呆けは悪いのか

ボス猿の悲劇

私の悪癖、国の悪癖

ゆとりの中から個性が生まれる

髪に歴史あり

主なき書齋の中で

硫黄島^{じま}

引用の母、マザーグース

童門冬二

福島譲二

高田宏

丸山崙子

加藤恭子

渡辺淳一

中川志郎

古山高麗雄

松山幸雄

秋山仁

鴻みのる

有賀博

鳥山淳子

181

186

190

195

202

208

211

215

220

232

236

241

247

大震災にまつわる「夢の知らせ虫の知らせ」

今井美沙子 252

うさぎのダンス

山上龍彦 256

父と母の昔話

漢字と遊ぶ

吉野弘 262

敗戦五十年目の暑い夏に

神坂次郎 266

北大路魯山人

丹羽友子 271

機会詩としての短歌

河野裕子 280

盲人は走る

杉本博敬 284

ヒツラの女

大木あまり 288

ドレスデンと東京

松尾文夫 295

時告げる星に満天の和名

桑原昭二 300

再会にマニユアルなし

高樹のぶ子 305

十分足らずの通訳

ママ・ボーイとオモニ

ビジネスはゲームである

久保田万太郎と常磐津のお師匠さん

ことわざこそ“人類共通語”

人種と草種の間柄

小便するな

父と母の昔話

’97年版ベスト・エッセイ集作品募集

高坂正堯

栗原葉子

川井健男

福田はるか

北村孝一

角田重三郎

加賀乙彦

森繁久彌

310

314

320

324

332

337

340

344

350

父と母の昔話

——
'96年版ベスト・エッセイ集

装幀 安野光雅

時計は溶けて

本の話

——新田次郎氏のことども——

司馬遼太郎
(作家)

もう古い話で、江戸時代かなんぞの思うが、私が三十代だった昭和三十一、二年のころである。私は大阪の新聞社にいて、文化部のしごとをしていた。

その新聞社は、「大阪新聞」という夕刊紙もあわせて発行していた。

その連載小説のお守りも、私の仕事の一つだった。もっとも、どなたに執筆をたのむなどという高度なことには、末輩の私はあずからなかった。

ただ一度だけそういう会議に出席した。たまたま自分の案が通って、東京へ出張したことがある。なんだか晴れやかな気分だった。

もっとも、ことわられた。

相手は、藤原寛人^{ひろと}という名の気象庁の課長さんで、気象官としてのその前歴半生が、知力と

筋力と不拔な氣力に満ちたものであることを、私はよく承知していた。

新田次郎さん（一九一二～八〇）のことである。

私より十一歳上で昭和初期学校を出、早くに富士山頂の測候にも従事し、山岳氣象の第一人者であることも、私は知っていた。

また、戦時下に満州國氣象台に勤務し、敗北とともに抑留され、その間、夫人の藤原ていさんが、凄惨な引揚げ体験をされたことも、ていさんご自身の体験記である『流れる星は生きている』で存じあげていた。

新田さんご自身は、私が訪ねてゆく前年、白馬山頂に五〇貫もの花崗岩かこうの風景指示盤を運ぶ強力を主人公にした『強力伝』という作品で、直木賞を受賞された。当時、私はこういう、筋骨と精神力をとまなう専門家が、小説を書きはじめたこと自体、明治後の小説家の歴史における異変だとおもっていた。

当時——いまでもそうだが——私は東京の地理に暗かった。

幸い、氣象庁は、私がつとめている新聞社の東京本社のおそばにあったので、迷うことはなかった。

むろん、新田さんは、庁内で非公務の客に会うような不謹慎なことはしなかった。近所の喫茶店を指定された。

その店は、天井が高かった。頑丈な梁はりと柱が露出した質朴なつくりで、その黒っぽい室内構

造そのものが、硬質のイスに腰をおろし、固肥りの上体を白いYシャツに包んでいる四十半ばの藤原技官の肖像のための額ぶちになっているように思われた。

余計な話はなかった。

なぜ自分はひきうけられないかという理由を必要にして十分に話された。

数学の講義のようでもあった。一年は三百六十五日しかないというのが、聴き手の私の唯一の数字知識である。新田さんは、それを精密に区分した。

そのうちの睡眠時間と勤務時間をさしひいてみせたうえで、その残った時間が、創作の執筆の時間である、という。ところがその時間に、現在予定している仕事の必要時間を入れると、ほぼ詰まる。

伺いながら、すこし端数が残るようにおもわれた。そのことをかぼそく指摘すると、

「それはですね」

新田さんは、かすかに微笑された。

「私は、若いころから、年に平均して四、五回は風邪をひきます。ひくと、一回に四、五日は仕事に手をつけられない。そのために予備としてそれだけの時間を控えておく必要があります」

体系美を感じさせるような断わり方で、私はむろんひきさがり、店先の路上で別れたあと、どういうわけか、「詩三百、思よしまヒ邪ナシ」ということばが、脳裏にうかんだ。